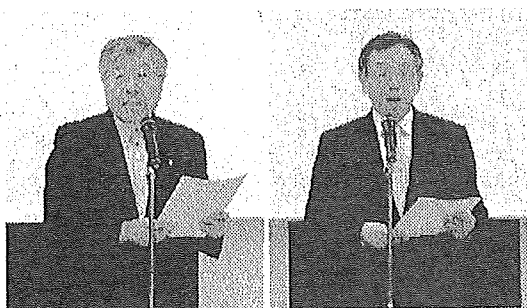


北海道大学 東京で初開催

## ロバスト農林水産工学「科学技術先導研究会」

北海道大学は、昨年5月にロバスト農林水産工学「科学技術先導研究会」を設立し、今年4月から6カ年計画で実施する「北海道大学ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点構想」がスタートしたことに伴い、このほど、同研究会を正式に始動させた。

ロバストとは「外的攪乱に打ち勝つ強靱性」のことで、同研究会は、農林水産業が工学などとの技術連携により、気候変動等の環境変化に適応しながら、持続可能な食料生産を行うことを目指している。



北海道大学 農林水産工学国際連携研究教育拠点構想の推進を目的とする「科学技術先導研究会」の発足式の様子が、7月10日に、東京・千代田区の三井住友銀行東館で、第7回ロバスト農林水産工学「科学技術先導研究会」を開催し、大規模な関係者をはじめ、全国の研究機関、行政機関、民間企業などから約90名が出席。名和豊春総長

と農業・食品産業技術研究機構の久間和生理事長の開会挨拶で始まり、増田隆夫工学研究院長が拠点構想の趣旨説明を行った。

次に、農学研究院の松浦英幸教授からバレイシヨの生命力を活用した発芽促進技術について、工学研究院の長谷川靖哉教授から光波長変換フィルムを用いた温室での食物育成について、水産科学研究院の都木靖彰教授から北海道におけるチヨウザメの陸上養殖技術の開発について、帯広畜産大学の瀬尾哲也准教授からアニマルウェルフェア（家畜福祉）をテーマとした研究シーズの発表があった。

続いての意見交換では、昨年度から参加している企業から、同研究会で大学の研究者や異業種の企業と出会い、共同研究を立ち上げたという成功例の紹介があったことを受け、産学連携は国全体の課題で、世界の国々と手結びながらも国内で産学官、又は省庁間の連携を徹底的に強化していくことが重要であるとの意見が出る等、活発なディスカッションが行われた。

同研究会は、今年7月17日付けで、農林水産省の「知」の集積と活用場の「ロバスト農林水産工学研究開発プラットフォーム」として認可され、今後一層、生産開発のニーズや課題を抱えた企業や機関と、それらの解決となり得る研究に従事する研究者が出会える貴重な機会を提供して行く予定。